

## 大自在

市）を拠点に、生と死、介護、浜名湖の環境問題などへ積極的に取り組んでいく。関わり合うほどに蔵書は増え、そして一万六千冊を超えた▼その蔵書が先週末、静岡市の県立大付属図書館の「岡村文庫」としてオープンした。三十年代半ばで、ものにしたベトナム戦争の報道写真がグラフ雑誌の最高峰、米国の「LIFE」に掲載され、一躍世界にその名を知られた人だ。その後、アフリカの飢餓問題や北アイルランド紛争など、活動の場を世界に広げていった▼岡村さんの取り組み姿勢を言い表す言葉に「シャッター以前」がある。二年前、本欄で取り上げたことがある。岡村さんと深くつき合った評論家米沢慧さんは、岡村さんの有名な話として「最初にカメラを持ったとき、フィルムを巻く方は知らなかった。だけど何にレンズを向けるかは知っていた」と紹介している▼シャッターを切る以前に、被写体の背景、本質に迫る思想や問題意識が必要だというのだ。「シャッター以前」のために準備したのが膨大な蔵書として残ったということだろう。徹底して読み、よく赤い線を引きいたそうだ。「どの本にも印が付いています」。弟の春彦さんが語っていた▼岡村文庫を回りながら、二、三冊手に取ってみた。どれも手になじんでいる。「乏しい資料で大きなジャッジをするな」。文庫の壁のポスターに書かれた岡村さんの言葉が印象深い▼刻々と変わる今日ほど判断の難しい時代はない。本質を見極めるには複眼的な思考が必要だ。「シャッター以前」の姿勢がますます大切になってきたといつことだろう。